

詩人スィラージに就て

鈴木 木 斌

今回はスィラージウッドイーン・スィラージを取りあげることとした。スィラージは既に第23回と第24回の大会で発表したムハンマド・クリー・クトゥブ・シャール、ワリー・ムハンマドの系統を継ぐダキニー・ウルドゥーの詩人である。

私はこの詩人に二つの点から特に関心をもっている。一つは、スィラージがナクシュバンディ派のスーフイーであるミルザー・マズハル・ジャーネジャーナーン（一七〇二～一七八一）や同じくナクシュバンディ派から出たムハマディヤ派のスーフイーとして著名なハワール・ジャ・ミール・ダルド（一七二〇～一七八四）などのようにチシュティ派のスーフイーであるという点である。常に指摘してきたように神秘主義詩を詠んでいる職業的詩人と神秘主義者の詩人については作品の解釈と評価に当たつて慎重な配慮が必要であるにも拘わらず、とかく神秘主義詩を詠んでいる詩人を神秘主義者あるいは神秘主義者の人物としてしまう傾向が強い。こうした中にあつてスィラージが数少ないスーフイーの詩人である点がそ

の作品の解釈の上でも大きな関心と興味をもたせるのである。

もう一つの点は、彼が十二才の時から精神に異常をきたし夢遊病者のような状態が七年間つまり十九才の時迄続いたことである。これは同じように若年の時に精神に異常をきたしたミール・タキー・ミール（一七三二～一八一〇）の場合と並んで私には非常に興味がある。詩人のこうした精神構造がその作品に果たしてどのような表現をとつて顯われるのか、あるいはこうした精神病的性格の持主が優れた詩人になりうる資質に恵まれているのか、という問題が私の興味の中心にある。以上の二点が今回スィラージを取りあげた理由の主たるものである。

スィラージは一七一五年にデカンのアウランガーバードで生まれ一七六三年にこの地で亡くなつたが、この詩人に関する評価は現在でも尚定まつていない感がある。ここではまず彼に対する種々の評価からみていくことにしたい。最初にス

イラージを取りあげているのは同時代の詩人ミールであるが、彼が一七五二年にベルシャ語で著わした詩人伝「ニカートゥ・シュアラ」の記述では「スイラージはアウランガバードの住人であり、サイヤッド・ハムザの某シャーギルド（弟子）のシャーギルドであると聞いているが、彼に就て分かることはこの程度である。作品は興趣なきものではない」と極めて簡単にしか扱っていない。ミールのこうした態度はダキニー・ウルドゥーの詩人、それもアウランガバード土着の詩人に対する軽蔑あるいは無視を表わしていると思われるが、その他にもガルデーズィーの「タズキラ・エ・レーフタギーヤーン」（一七五二）、ミール・ハサンの「タズキラ・エ・シュアラ・エ・ウルドゥー」（一七七〇～一七七七）、ムスハフイーの「タズキラ・エ・ヒンディー」（一七九五）、ルトウフの「グルシャネ・ヒンド」（一八〇一）などの詩人伝をみてもどれもミールの記述を一步も出していないのである。一方で、シャフィーク・アウランガバードイーが一七六一年から同六三年の間に出した詩人伝「チャマンスターネ・シュアラ」は彼がスイラージの親しい友人であつたという個人的関係から可成り詳しく取りあげ且つ高い評価を与えているのは当然であろう。更に時代が下つた詩人伝ではシェーフタの「グルシャネ・ペーハール」（一八三四～三五）が「デカンにおいてワリー以後のウルドゥー詩の繁栄はスイラージによる

ものであり、彼の名声は高かつた」と記している。ウルドゥー文学史に目を向けてみると、R・B・サクセーナの古典的な文学史「ウルドゥー文学史」（一九二七）は何故か全くこの詩人に触れていないが、一九三二年に出版されたT・G・ベイルリーの「ウルドゥー文学史」では「ワリーの回りに群れた詩人の中で最も偉大な詩人であり、その作品は主題の新鮮さ、思想の高尚さを示し、その言葉が今日のウルドゥー語に類似していること驚くべきである」と積極的な評価がなされている。もつともベイルリーによるこの記述は、ナスィールッディーン・ハシミー教授が一九二三年に出した大著「ダッカン・メン・ウルドゥー」中の評価をそっくりそのまま使っているだけである。最近のものでは一九六四年ムハンマド・サードイク教授による「ウルドゥー文学史」が「ベイルリーは、ワリーの回りに群れた詩人中で最も優れた詩人としているが、感情にもスタイルにも何ら顕著なところはみられず、過大に評価されている」と冷たい批評で片付けているのが目立つ。又、一九七一年に出た「パーキスターン・インド・イスラーム教徒文学史」第七巻はスイラージの父親の名をサイヤッド・ダルヴェーシュ・イブン・サイヤッド・ゴウハルとしメディナの長老サイヤッド・ムハンマドの子孫であると記しているが、あとは一九二一年にアブドウル・ハイイが著した詩人伝「グレ・ラーナー」の記述によつてことが分かる。こ

のように種々の資料に当たつてみた限りでスイラージに就てこれ迄最も詳細に論じているのは文化史家ジャミール・ジャリビーが一九七七年に出版した「ウルドゥー文学史」である。氏はこの中で一七頁に互つてスイラージを取りあげ「ワ

リー以後ミールとソウダーに至る間の時期における最大の詩人」としてスイラージを位置付けている。ジャミール・ジャリビー氏のダキニー・ウルドゥーの詩人に対するこの高い評価は一つの明白な意図をもつてなされているように思われる。それは第一に現在パーキスターンの国語であるウルドゥー語がこの国で五千万以上の使用人口をもつ最有力語パンジャービー語を母体として形成されたと主張することによつて国語の地盤を強化することである。更に、このパンジャービー語を母体として形成された言葉がデリー・メーラト周辺で話されていた方言と混合し、やがて南インドのデカンの地に達してダキニー・ウルドゥー語となつたと指摘することによつてパンジャービー語とダキニー・ウルドゥー語との密接な関係を認識させようとする意図である。このことは別として、スイラージの評価がやつと定まりかけてきたということが出来るようである。尚、一九七二年にオックスフォードから出版された古典ウルドゥー抒情詩のアンソロジーをみると、選択された二十二人の詩人中スイラージはクリー・クトゥブ・シャー、ワリーに次いで三番目に入っているが詩篇の

数を較べるとクリー・クトゥブ・シャーが四篇、ワリーが五篇なのに対しスイラージは三篇である。この四・五・三という数はダキニー・ウルドゥーのこれら三詩人に対する評価の度合を示すものとして興味深い。

此処でスイラージの生涯に就て簡単にみていくことにしたい。スイラージに関しては彼が一九五五年に編纂したペルシヤ詩人の詩選集「ムンタハバ・ディーワーンハー」の序文に自分の半生を記しているものが基本的な資料で、これが先に挙げた詩人伝「チャマンスターネ・シュアラー」などにも引用されているわけである。これによるとスイラージは本名をミール・スイラージウッディーンといふデカンのアウランガバードで生まれた。スイラージは雅号である。始めの内スイラージはペルシヤ語とペルシヤ文学に傾倒している。十二才の時にチシュティ派の著名なスーフィーであつたニザームッディーン・オウリヤーのムリード(弟子)のシャー・ブルハヌッディーンの聖者廟に参じて忘我の恍惚境をさ迷う状態が嵩じて精神に異常をきたした。夜中に町の外を徘徊する夢遊病者になつたが、この状態でペルシヤ詩が次々と口から出てきたという。もしこれらのペルシヤ詩が書き留められていたら部厚い詩集ができあがつていただろうとスイラージ自身が述懐している。

スイラージがミールの記しているようにサイヤッド・ハム

ザのシャーギルドのシャーギルドであるというのは論拠がなく、彼自身ではこのサイヤッド・ハムザという名前をあげていない。要するに、スィラージには詩作の上での特定のウスタード（師）はいなかったことになる。

スィラージは十九才の時に精神異常の状態から抜け出した。正気に立ち返った切つ掛けが何であつたのか分からないのは残念である。この頃つまり一七三四年頃に彼はシャー・アブドゥル・ラフマン・チシュティーというスーフイーのムリードになつた。これによつてスーフイーとして又詩人としてのスィラージの生活が生涯律せられることになつたわけである。彼がペルシャ詩からウルドゥー詩の方へ興味を移したのは教友のアブドゥル・ラスール・ハーンの言葉によるもので、以後ガザル、マスナヴィー、ムハンマス、ルバーイー、タルジーイ・バンドなど色々な詩型でウルドゥー詩を詠み始めた。一七三九年にアブドゥル・ラスールがディーワーンを編纂したが、この詩集には五千詩句が含まれている。今仮にこれを七詩句で一篇のガザルに換算してみると約七百篇になる。年に百数十篇、三日に一篇以上の割になり、これは非常な多作という他はない。スィラージはこのディーワーンを師のシャー・アブドゥル・ラフマンに捧げるが、師は却つて彼が詩を作ることを禁じてしまつた。スィラージが二十四才の時の出来事であるが、この時期のスィラージは三日に一篇程

の詩作に熱中し、朗詠のための詩会に出席するなど多忙で信仰の方が疎かになりかねない状態であつたのであろう。師がスィラージの詩作を禁じたのもある意味では師がスィラージの詩人としての卓越した才能を見抜いていたからに他ならないと考えられるのである。以後スィラージは師が亡くなる迄詩作から遠ざかり信仰の道に専念した。彼自身はスーフイーとしての修行と詩作の間に矛盾を感じていたようには思えない。詩によつて神への熱烈な愛を唱いあげることがスーフイーにとつて別に禁じられるべき所業ではないのである。それはとにかく、スィラージの詩人としての名声は「グレ・ラーナー」によるとこのディーワーンによつて高まつたとされているが、数年の内にディーワーンに収められている丈でも五千詩句を詠んだような詩人であれば殆ど引切り無しに詩会などで自作を詠んできかせていた筈であるから、彼の詩人としての評判はこのディーワーンが編まれるに至つた数年間で既に充分に動かし難いものになつていたと考える方が自然であるろう。

スィラージは自分で

おゝスィラージよ　ワリーが後、汝の他に詩文の主　絶えて見当
らず

と詠んでいるが、この一句にはワリーを継ぐダキニー・ウルドゥーの詩人は自分丈であるという強い自身が表わされて

いる。もつともこうした表現は何もスィラージに限つたものではない。やはりダキニー・ウルドゥーの詩人でスィラージと同時代のダーウード・アウランガーバーディー（一七五四）も

ワリーが後 余多の詩人出でたれど

デカンに名高きは ダーウードが詩

という誇張に満ちた一句を残している。これはワリーやミールにとつても全く同様であるが、私は以前、こうした詩句は詩人の強い自尊心と自己顕示欲を示すものである丈でなく、ガザルの表現技法上の誇張が恋人を讃える場合と同じに自分にも及んでいるのではないのかという考えを提示した。

こうした詩句を詠むことが一つの作法であるとすれば、詩会の席などでのこの種の詩句の応酬は参会者にとつて一段と会の熱気を高めるものであつたに相違ないのである。この問題は改めて別の場で取りあげることにしたい。「グレ・ラーナー」によるとアウランガーバードの詩会はいつもスィラージが座主であり、彼自身も自宅で週に二度宗教音楽サマーの集會を催していた。この集會には町のウラマーやシェーフその他あらゆる階層の人々が参加したが、職業的歌手であるカッヴァールがスィラージのガザルを朗詠すると彼らは恍惚境に誘われたという。晩年のスィラージは宗教者として高い尊敬を集めたが一人住いで二人の使用人を置いている丈という

質素な生活を送っていた。「パーキスターン・インド・イスラーム教徒文学史」によると胃病と下痢で、「アンソロジー」では痔疾に悩まされた彼は一七六三年（イスラーム暦一一七七年シャッワール月四日金曜日）に亡くなつた。墓廟はハイダラーバードに現存するというのが、一八八四年版のハイダラーバード政府官報などにも特に記載はなく、スーフィーとしてのウルスなどは行なわれていないようである。

スィラージは高邁な思想と厳肅な氣質の人物で、高潔の士であつたと伝えられている。詩会の座主であり自宅でも週に二度サマーの集會を催していたことから他人との交際を好まない孤高の宗教者ではなかつたことが分かる。彼のシヤールギルドは多数にのぼっているがその内でイシュラト、フトウワト、フィガン、ニサル、パルワナ、ページジャー、ズイヤー、カムタルなどが著名詩人にあげられている。詩作の面でスィラージがワリーの影響を受けたことは明らかである。ナスィールッディーン・ハシミー教授は「彼の詩の直截簡明さに驚ろかされる。当時の詩人のものとは思えない」と述べていられるが、これはクリー・クトゥブ・シャーに連なるダキニー・ウルドゥー詩の一つの伝統といふことができる。「アンソロジー」の解説はスィラージの詩の重要な要素の一つとして神秘主義をあげているが、此処で又始めに触れたように神秘主義詩の解釈の問題が出てくるのであ

る。つまり、職業的詩人の詠んだ神秘詩が彼らの内面の思想や信仰を必ずしも現わしているものではないという考え方を前提として、それでは神秘主義者と称される詩人の詠んだ詩は神秘主義詩なのかというもう一つの問題にぶつかる。ガザルで詠まれる愛イシュクは現世の恋人に対する愛イシュケ・マジヤーズィー仮の愛と、神に対する愛イシュケ・ハキーキー真の愛とに分かれるが、何れの愛をガザルから感じ取るかは聴いている側の主観や態度に可成り左右されるわけである。ハーシミー教授の「彼のガザルはサマーの集会でスーフィー達には精神的な糧となり、一般の聴衆には興趣を与えた」という説明は妥当なものであるが、ガザルに詠まれたイシュクの解釈に就て私は、職業的詩人が神秘主義詩を詠むという状況と正に逆に、神秘主義者は現世の愛の強さを詩の言葉の中に昇華させるために寧ろ進んで熱烈な恋愛詩を詠むのではないかと考えている。

愛は互いに生ずるもの

片手で拍手が鳴るわけではない

というスイラージの一句は明らかに現世の愛を指しているといえよう。ジャミール・ジャールビー氏はスイラージをイシュクの詩人と規定し「スイラージのイシュクの熱情は極めて強く、表現は非常に生き生きとしているので感情と言葉が一つに融け合っている」と評し、更に「イシュクは彼の人生

の円であり、恋人はその中心点であり、詩作はその表明である」と論じている。氏はスイラージをウルドゥー恋愛詩の伝統を堅固な土台の上に打ち立て、恋愛詩の伝統をワリーからミールへと伝えた詩人として位置付けているが、神秘主義者の詠んだ現世の愛と職業的詩人のそれにはイシュクの質の問題が依然として残っている。いう迄もなくスイラージが真の愛を詠んだ詩も又存在しているのであり

愛の不思議を聞いてより

もはや狂気は失せ 恋人も消えた

に始まる最も有名なガザルの愛が神への真の愛を意味していることは明らかである。

技法上からみたスイラージの詩はワリーにおけるペルシャ詩の伝統を更に進め、イザーファを多用した構成や豊富な比喩などによつて特長づけられている。この面で彼は若年期に身に浸みこんだペルシャ詩の影響を最後迄もち続けたということができよう。

スイラージはガザルの他にも叙事詩マスナヴィーに優れた「ブースターネ・ハヤール」など十二篇を残している。彼の詩集はアブドウル・カードイル・サルワリーの編纂による「クツリヤーテ・スイラージ」がハイダラーバードから、その他ディーワーンや詩選集数点が出版されている。

（東京外国語大学教授）